

小蝶物語

野口雨情

●京ちゃんの巻

翼を傷めた蝶々が一疋。お庭の隅の薔薇の花片の上に宿つて一夜を明しました、その次の日のことでした。

京ちゃんと言ふ。今年七歳になりますます可愛らしい兒が、平常のやうにお裏のお山へ登つて遊んで居りますと。

『京ちゃん京ちゃん。』と聞き馴れない小さな聲でもつて、呼びますので京ちゃんは屹度吃驚いたしましたのでせう？。清しい眼を真丸くして矢鱈に四方を見廻しました、が、誰れも四邊に見えませんでした。

京ちゃんは、不思議さうに立つた儘、何にか考

へて居りましたっけが、漸安心したものと見えまして、再び草の上へ座りました。

さうしますると、又。

『京ちゃん、京ちゃん。』と續けざまに呼びましたので、今度は急に氣味が悪くなつたのでせう？。京ちゃんはサツサとお家へ歸つて參りまして、直その事を姉さまにお話し致しました。

すると。

『そりやア、野狐が京ちゃんを誑やうと思つて京ちゃんの名を呼んだのですから、もうお山へ登つちや、不可せんよ。』と姉さまに申されたのでもうう〜お山なんかへ決して往くもんぢや無いと幼心に京ちゃんは思ひました。

で、京ちゃんはお山へ登らずに、庭隅の垣根の傍で遊ぶことに斷ました。

丁度、その次の次の夕方です。今日は終日垣根の傍へ小さな薙を敷いて、様々な真似をして遊び暮らしたので、もうか家へ歸つて行かうと爲ますると。先達日お山で呼んだのと同じ聲で。

『京ちゃんもうお歸り？。京ちゃん、京ちゃん』
 と言はれましたので。京ちゃんは吃驚したの何んので。

『あら野狐！』と、驅け出さうとしますと。
 垣根に咲いて居る薔薇の花の上に小さな蝶々が一疋。

『京ちゃん、野狐ぢやありませんよ、小蝶子之助とふものですよ。』と言ひ乍ら頻りとお辭儀を仕て居りますので京ちゃんは呆れ切つて見て居りますと。

『京ちゃん！私は先達日の大雨で、こんなに翼を

傷めましてね……。』と馴れくしく翼を伸して見せましたので。

『まあ、本統に翼が破れてること、お前痛みやア仕ないの？。』と氣の毒さうに言ひますと。

『は、今ぢや痛みも何んにも仕ませんがね、一時は随分困りましたよ……。第一飛ぶことが出来なくなつちまつたのでせう、そんなもんで食物を求すことも何にすることも出来ないんですもの、も少しで餓死して仕舞ふ所を、庭隅に薔薇の花が咲いて居たのを思ひ出しましてね、漸の事で此處まで来て命だけは助かりましたが今でも遠飛びが出来なくて毎日々々倦屈で堪りませんからね貴嬢と一所に遊ばせて戴き度いと思ひまして先達日もお山まで貴嬢の後を行つたのでしたツけがね……。』

『さう、お前だつたの？。』と京ちゃんは可哀想に

思ひましたので『私だつて外に友達はありやしないのよ』と申しますと。

『ぢや、私を遊びお友達にして下さいませんか』と子之助は莞爾々々しながら言ひました。

『だがお前、何時までも私のお友達になつて遊ぶか。』

『え、もう、遊ばせてさへ下さるんなら、此のお花の上を御借り申して、茲を私の家とさめましてね、秋風が吹いて私が死んで仕舞いますまで遊ばすすとも。』

『ぢや明日から二人で遊ぶことにしやう。』と之れから、京ちゃんとお蝶子之助は至つて間の好いお友達となつて毎日のやうに面白く遊びましたと云ふ。

(京ちゃんの巻をばり)

二人兄弟

矢橋小葩

いつの頃でしたか、ある所に源一とお鋭といふ二人の、大層心のよくない夫婦がありました。

誰だつて、お父様やお母様は太切でせう。それにこの夫婦は、廣い世界に、たつた一人しかない而かも聾で、足腰のあまり自由でない、老人のお父さんを、それはそれは、ひどく取り扱かつて。

まわ、かうなんですの。

通常の人なら、自分等が食べなくつても、おいしいものは、先づ親に上げますのに、この夫婦は反對で、自分等ばかりいつでも御馳走を、食べてゐて、このおはれなお祖父さんには、きたないお膳で、かけたお茶碗で、毎日毎日朝も晩も、わづかぼつちな、ご飯と澤庵を二ツ切だけ。それより